当事者発の自立した
子育て支援事業を探して

特定非営利活動法人わははネット
理事長　中橋　恵美子

事業概要

「香川から子育てをもっと楽しく」をモットーに、地域密着型子育て情報誌「おやこ DE わはは」の編集出版、子育てひろば「わはは・ひろば」の運営（3拠点）、携帯電話を活用した子育て情報配信システム「わははメール」の運営、その他地域展開事業等を実施。その他に全国子育てタクシー協会の立ち上げや、地元のファミリーサポートセンターの立ち上げ、運営助言等も行う。

行政からの受託事業（高松市子育て総合情報発信事業）の他、民間の子育て支援のアドバイザーなども行っている。

特定非営利活動法人 わははネット

〒760-0042　高松市大工町1-4
TEL. 087-822-5589
FAX. 087-816-5582
E-mail　info@npo-wahaha.net
URL：http://www.npo-wahaha.net/

◆きっかけ

15年前、結婚を機に私は生まれ育った香川県を初めて出て新しい生活をスタートさせました。

夫は同郷の同級生。付き合いは長く、2人の新しい生活に期待していたものの、すぐに妊娠、出産。期待よりも次から次に出てくる経験したことのないシーンに遭遇し戸惑いと不安のほうが大きかった。

例えば妊娠が分ったとき。知らない土地で産婦人科の情報等知るはずもなく、周りに友人知人もなく、教えてくれる人もいない。頼みの綱は電話帳。目的別に検索できる電話帳だのみの孤独な新婚生活は期待していたものと大きくかけ離れていました。

そんな経験を元に、結婚3年後（子どもを2人年子で授かった後）、家族で地元香川県へ帰ってきたことをきっかけに、育児サークルの立ち上げを決意。地域に密着した育児情報の不足から来る子育ての不安を誰よりも感じていたからこそ、同じ子育て中の当事者が集まり、子育て情報を交換しあえるような媒体を作りたい、と考えたからでした。

1998年4月育児サークル輪母ネットを発足。10組の乳幼児を連れた母親たちが「地域密着型の子育て情報誌を出版しよう！」と集まりました。地元の公民館の人に「子連れはうるさくて汚すから…」といやな顔をされながらもいたしかたなく、ハイハイする子どもを連れているため和室のある公民館を転々としながらの活動スタートでした。

◆社会を変えることができる

地域密着型子育て情報誌を子育て当事者（母親たち）の手で創刊しよう！情報不足からくる育児不安を持った母親を一人でも救おう！そんな思いで、出版経験のない母親たちが子どもを連れて取材し、子どもが寝てから原稿を書き…と慣れない作業を1年ほどかけてし、地元の印刷会

社へ原稿を持ち込みました。

120ページの雑誌を3000部。印刷費だけで100万円ほどの見積もりがあがってきて、皆で驚いたが後戻りはできません。独身時代にためていた貯金を崩して仲間と出資し、創刊にこぎつけました。

当時の印刷会社の社長は、まさに団塊世代の人で、私たちが子連れで汗をかきながら、しかし賑やかに楽しげに活動する様を見て珍しそうに言ったひと言が今も忘れられません。

「君たちは今の世代の子にしては珍しく、社会を変えようとしているんだね。ボクたちの世代は子どもの頃から社会が変わっていく様を見てきた。例えばテレビがなかった家にテレビが来て、白黒がカラーに変わり、また舗装されていなかった道路がある日舗装されてきて…と社会が変化する様を毎日見ていた。

だから僕たちは“社会は変わる、そして僕たちが社会を変えられる”と信じていた。ところが君たち世代は出来上がった社会に生まれ変化を知らない。社会が変わることをあまり知らないんじゃないかと思う。だから自分たちが社会を変えられる、という力を持っていることも知らない。実は僕たちは君たち世代を“かわいそうな世代”だと思っていたんだ。しかしどうだ。目の前にいる君たちは誰かのために、こうして命令されたわけでもないのに自ら出資し、子育て中というたいへんな状況にも関わらず生き生きと活動を始めた。その社会を変えようとしている姿勢をボクは応援したいと思うよ。頑張りなさい」

この社長に言われた言葉にハッとしました。

「社会を変える？私たちが？変えられる？」

それまでは、結婚出産を機に、生活パターンが激変し、時間もお金も自由にならず、スケジュールは真っ白。○○ちゃんのお母さん、□□さんの奥さん、と呼ばれることはあっても自分の名前を呼んでくれることがない環境になじめず、もがく思いで、社会とつながりたい！という自分たちの活動の場を求めてサークル活動をスタートさせたようなものだったのに客観的に見て「社会を変える活動」だと言われて、はじめて目が覚めたような気がしました。

◆社会が変わった！？

1999年香川県初地域密着型子育て情報誌「おやこDEわはは」を創刊。1冊650円で書店販売。素人の母親たちが作った雑誌で、書店をはじめ、周りからは「こんなの売れないでしょ」と言われながらも、創刊直後から大きな反響を呼び、初版3000部は瞬く間に完売。2000部増刷するほどに。

情報誌を読んだ子育て家庭からの反響は予想以上に大きく、「私も子育て中だけど、何かもっとできることがあるような気がして勇気が出た。」「引きこもっていたけど、もっと前向きに頑張りたい」など多数の声が寄せられると同時に、どこへ届けて良いのか分からないまま不満や愚痴として社会に届いていなかった声も届けられるようになりました。

例えば以下のような長い手紙を読者からいただいたこともあります。

わははネット様

私は、結婚後も働き続け、出産を機に産休、育児休暇を取り1年ほど会社を離れ、そして最近また1歳前の娘を保育園に預け、元の職場に育休明けで戻りました。出産前と同じように働ける、と思っていたものの、保育園に預けた娘は再々熱が出たり病気をもらってきたりして園を休まねばならず、その度、私が仕事を休み娘の看病にあたりました。最近ではそんな私に対して職場も冷たくなり、迷惑をかけていることを申し訳なく思いながら働いています。

先日、朝娘を起こした時に、少々体が熱く感じました。が、しかし、ここで体温計で娘の検温をして、熱があることを確認したら保育園を休ませなければならないので、あえて検温をせず、「思いすごしだ」と自分

に言い聞かせ、そのまま娘を保育園に預けて仕事に行きました。そうしましたところ、案の定お昼前に保育園から職場に電話が入り、娘が熱が出ているのですぐにお迎えに来てください、と言われ、私も冷たい空気を感じながらも職場に事情を話し、何度も頭を下げて早退して保育園へのお迎えに急ぎました。

保育園に着くと保育士さんが「お母さん、お子さん朝から熱があったんじゃないの？ちゃんと見てないと駄目じゃない」としかられ、また頭を下げてお詫びしました。熱のある娘を抱き帰りに小児科に寄り診察をしてもらったところ、帰りがけにお医者さんから「お母さん、この子朝から熱があったんでしょう。どうして朝から病院に連れてこないの？」と叱責され、また頭を下げつつ病院を後にしました。夜帰宅してきた夫に今日の出来事を話したところ「なんで朝からおまえが仕事を休んで子どもを看なかったんだ」と言われ、愕然としました。

どうして私は一生懸命子育てと仕事をしているのに、周りに頭を下げてばかりなんですか？

この手紙を読んだ時、私は涙が止まりませんでした。子育てを我慢や苦痛なものにしてしまってはいけない。このお母さんの叫びはどこかに届けてなんとか解決できないだろうか？

仲間たちと各方面を調べていたら転勤族の仲間が「私が以前住んでいたところは“病児保育施設”と言って病気の子どもを預かってくれるところがあったよ」と言います。すぐに調べると当時は香川県内に一軒もなかった病児保育施設が他県には少しずつできてきていることが分かり、資料を取り寄せました。

そして、「病児保育施設を香川に作ってほしい」この思いで、県知事へアポを取りました。

知事へのインタビューという形でのアポもスムーズにとれたわけではありません。子育て中の母親集団、という今まで社会的に認知されていない団体からの面会依頼は苦労の連続でしたが、なんとかインタビューに成功し、子育て当事者の声を（働きながら子育てをするお母さんの手紙も含め）生で聴いていただくことに成功し、その７ヶ月後に県内初の病児保育施設が誕生しました。

私たちが届けた子育て中のお母さんの声がきっかけとなり、行政が動き、実際に施設が出来た！これは何より私たちの活動に大きな自信と新たな気付きをくれました。

◆次々に現れる新しい課題

大きな反響を呼んだ地域密着型子育て情報誌の創刊をきっかけに私たちは社会に目を向けるようになり、またこの地域で子育てを日々する生活者としても様々なことに気づくようになりました。

子育て中のママ達の話を聞くと、外に出かけること自体が大きなハードルになっていて情報誌を読みたくても書店まで行くことが困難な人たち。そんな精神的にも不安定で、引きこもりがちなママにこそ、この情報誌を届けたい、でも、自分たちには一軒一軒届けて回る知恵もパワーもない。

伝えたいことは一つ。「勇気を出して子どもと一緒に一歩外に足を踏み出せさえすれば、大変なこともあるけど、仲間もできる。楽しいことだって見つけられる。」でも外に出てくるきっかけになる情報すら届いていない状態を打破するためにはどうすればいいか？

そこで私たちが着目したのが携帯電話でした。ちょうどそのころから主婦家庭にも一人一台携帯電話が普及し始めたころだったのです。

★わははメールの誕生

携帯電話に地域の子育て情報が届いたらどうだろうか？外に出るきっかけとなる子育ての催しや、子育てを応援するメッセージ、発達の相談

などの窓口紹介などができれば…。

そこで私たちは香川県を10のブロックに分け、より地域性を持たせた情報を発信。同時に子どもの年齢（月齢）ごとにピッタリの情報しか届かないような、「エリア」と「子どもの年齢」を分類し“あなただけに必要な情報をこちらで選んで届けます”というスタンスの情報配信の仕組みを構築しました。

また、情報入力スタッフは各地域ごとに生活している子育て中のママ達。わははネットの情報誌を読んで「私も何かしたい！」と応募してきた人たちが、その地で生活していないと手に入らないような情報まで（例えば公民館に置いている小さな規模のグループのチラシなど）収集し入力してくれました。

ママ達も支援される側だけでなく、支援する側に回ることもできる、という循環型の子育て支援スタイルを意識し始めたころです。

この仕組みは就学前児童（0～6歳）のいる家庭に向けてのみの登録制（無料）のサービスですが瞬く間に会員は4000名を超えました。

しかし、当初、行政側は「母親を携帯漬けにする」「手軽なツールで自ら考えるきっかけを奪う」と、携帯電話を活用した子育て情報配信サービスには理解がありませんでした。

そこで私たちは子育て情報誌同様地元の企業や店舗をまわり、理解のあるところから協賛をいただいたりアンケートを有料でとったりしながらコミュニティビジネスの手法を使い行政の手を入れずに独自に自立型モデルとして運営をしています。

この携帯配信システムを受信しているママたちから、また新しい子育て支援者が生まれ、そして「香川で子育てしてよかった！」「いつも誰かとつながっている安心感を得られる」と口コミで大評判になり、同様の課題を抱えている他地域へ、現在このシステムを移転利用していただくことも始めています。

★子育てひろばの設立

情報不足からくる育児不安を解決しようと子育て情報誌を発行し、その後、外出しにくい人へも情報を届けるツールの開発として携帯メール配信事業の実施…と事業展開していく中で、新たな課題が見つかりました。それは「情報発信」はあくまで一方通行であり子育ての地域情報は双方向でやり取りをする必要があることに気付いたのです。

例えば地域の病産院情報や幼稚園保育園情報などは、ネットで調べられるような「給食の有無、お月謝、園の方針」などは調べられても、その先の情報は分りません。お母さんたちは「PTA活動が面倒くさいって本当ですか？」「こんなトラブルを抱えた先生がいるって本当ですか？」などと事細かいことを知りたがっています。些細なことですが、子どもと二人きりの世界で生活しているママにとっては一大事であったりします。

そういった情報はいい意味での不確かな口コミュニケーションとして地域の中の井戸端的なところで人から人へ交流しながら伝えられるべき情報だと考えました。

そこで「子どもを核とした地域コミュニティーの再生」を目指すべく、井戸端（交流の場）を作ろう。と2002年、商店街空き店舗を借りて“わはは・ひろば”を開設しました。

当初は自主事業として実施し、現在は行政からの委託事業として香川県内に3拠点を持ち、展開しています。そこには0～3歳の子どもを連れたママ（時にパパやおばあちゃん）が毎日1拠点20組～30組遊びに来ます。ここでは子育て当事者の現場の生の声が毎日溢れています。子どもが様々な人とふれ合い成長する場でもあり、また親が仲間を作ったり子育ての相談をしたり「教えたり、教えられたり」することで親として育つ場にもなっているように思います。

また、場所が出来たことで子育て中の人たちだけでなく地域のお年寄りや商店主、学生さん等と関わる事が増え、様々な立場や世代の人と交流することで、これまで見えなかったものが見え、気付くきっかけにつ

ながってきています。

◆企業を巻き込んで子育て支援

★子育てタクシーの誕生

子育てひろばでは、連日大勢の親子連れが来て子育ての不安や悩み、愚痴などを他愛もないおしゃべりと共に吐露していきます。そこには社会の課題や解決するべき問題も見えてきます。私の先輩が「子育ては我慢の申し送り」と言っていたことを思い出します。「私も子育て期には、あれもこれも我慢してきたんのだから、あなたたちも我がまま言わすに子育て中はそういうもんだから、子どもがある程度大きくなるまで我慢しなさい」と私も何度言われたことでしょうか。

ある日、子育てひろばに遊びに来たママが自分の出産時の経験を語ってくれました。

私の出産体験は酷かった。出産体験、というより、出産前の体験なんだけど…。

臨月のある日、上の子（2才男児）と家にいる時に、突然の破水。股の間から流れ出る羊水（羊水とは胎児を包んでいる水分）に驚きつつも、プレママ教室で習った「陣痛や破水が来たら慌てて救急車を呼んではいけません。自分で車を運転するのはもってのほか！ 家族、もしくはタクシーで速やかに病院に行くこと」を思い出し、家人も留守だったためタクシーを呼び、階下へ。

すぐに入院になるであろうから簡単な荷物と2才児を連れ、流れ出る羊水を押さえる為、股の間にバスタオルを挟み、ぎこちなく、社宅3Fから階下へ降りている時、すでにタクシーは社宅下で待機。せわしなく何度もクラクションを鳴らされ、焦る気持と痛むお腹、脇の荷物と、股の間のバスタオルを押えヒーヒー言いながら、ようやく1Fに降りたとたん、しびれを切らしたドライバーが、股の間に挟まったバスタオルを見て一言。『俺の車のシートを汚すなよ。』

そこから頭は真っ白に。狭い社内で、騒ぐ上の子どもとお腹を押さえ、重い空気に押しつぶされそうになりながら、ついさっきまで「お腹の子どもにあえる！」という痛いながらも喜びに満ちた気持の風船が、このドライバーの言葉と、かもし出す重い空気で一気に萎んでしまったのだ。と。

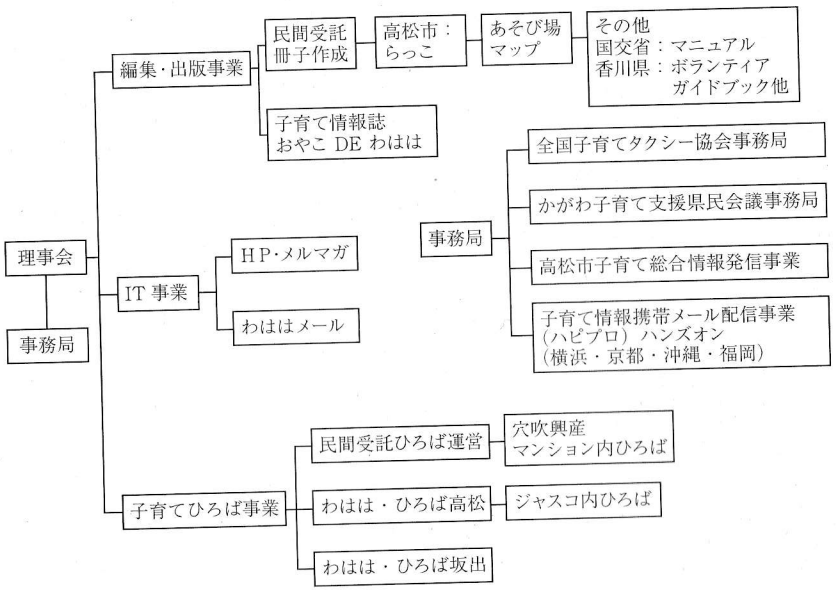
こんな気持で子どもを生むなんて、、、私、2度と出産なんかしたくない！ と吐き捨てた彼女の一言が私に刺さりました。

そこでタクシーに関する子育て中のお母さんたちの意識調査を携帯メール上及び子育てひろばで実施。タクシーというイメージが子育て支援とかけ離れていること、当たりはずれのある乗り物という認識で普段から積極的に活用したいと考えている人が少ないこと。しかしファミリーサポートセンター等では地域の支え合いという名の下、地域の子ども好きのおばちゃんが軽自動車で預かったこどもの送迎をしていて内心預ける方も預かる方も不安な気持ちを持っていること、などが分りました。また逆にタクシーは365日ほぼ24時間稼働し常に電話がつながる状態であり、ドアTOドアの現在の子育てサポートでは出来ないようなサービスが可能な業種であることも改めて気付きました。

そこで、このアンケートデータ等を持って「子育てに優しいタクシー」を作ろう、と思い企画を書いたのが子育てタクシーの原型です。ドライバーさんに子育てに必要なスキルを身につけてもらうため専用の講座を受講してもらい、また利用者には安心できるタクシーである事が分りやすく表示します。

香川県内で地元タクシー会社と2年ほど実験的に実施したのち2006年、全国子育てくタクシー協会を設立。現在北海道から沖縄まで約70社、約1000名ほどのドライバーを育成し登録しています。

NPO法人わははネット　組織図



◆これからに向けて…

これまでの取り組みの一つ一つで私たちが大事にしてきたことは自立できるモデルであることと当事者性を常に持つこと。

子育て支援サービスとして机上で考えたものではなく、まさに今子育てしている人たちの声を常に聞き、また当事者を仲間にして事業を行っていくことで、よりニーズに近い事業展開が可能になること。

そして、当事者だけで事業を完結するのではなく様々な機関（行政・地域・企業）をバランスよく巻き込むことで、資金調達をはかり、自主自立できる組織へと構築していくことを常に心がけています。

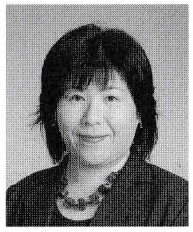
また何でもかんでも私たちで解決しよう、とは思わずに、足らないところは人の手を借りたり、できない！と言うことも大事だと思っています。

我々の組織は、責任を持って事業に取り組む理事や常勤職員の他、志を持って関わってくれている有償ボランティアのスタッフ、また自分たちも子連れだけど支援される側ではなく誰かの役に立ちたい、と関わってくれる無償ボランティアのスタッフたちで構成されています。企業にはない特色があり、またボランティア団体にもない特色があります。

昨年は団体ミッションだけでなく「クレド」を作り、組織が大きくなっても想いがブレない組織づくりも意識し始めました。

この特性を生かして、常に新鮮で柔軟に起動でき、しかし安定した組織運営ができる体質を持った団体としてさらに活動を充実させていきたいと考えています。

中橋恵美子（なかはし　えみこ）



中学3年、2年、小学4年の3人の子を持つ母。
平成10年育児サークル輪母ネットを発足。平成14年NPO法人格取得。
商店街空き店舗等で子育てのひろばを3か所運営。また、地域密着型子育て情報誌「おやこDEわはは」の発行などを手掛ける。また子育てタクシーの発案者であり、全国子育てタクシー協会を立ち上げ事務局長もつとめる。NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事、NPO法人たかまつ男女共同参画ネット理事等もつとめる。
2008年は子どもと家族を応援する日本功労者表彰内閣総理大臣賞受賞、日経ウーマンよりウーマンオブザイヤー2009、2009年12月にはにっけい子育て支援大賞を受賞